

## 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

著者	中司 由起子, 江口 文恵, 柳瀬 千穂, 深澤 希望
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	37
ページ	11-47
発行年	2013-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/8077">http://hdl.handle.net/10114/8077</a>

## 報告 ワークシヨップ

## 「江戸初期型付に基づく実験的復元」

中司由起子・江口文恵・柳瀬千穂・深澤希望

二〇一二年一月一五日に鎌仙会能楽研修所舞台にて、ワークシヨップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」をおこなった。

この企画の出発点は山中玲子氏を中心に右記の四名が二〇一一年一月から毎月開いている、東北大学付属図書館所蔵の秋田城介実季自筆の型付を読む研究会である。研究会は、メンバーが城介型付中の曲を一曲ずつ担当、型付の写真版をもとに翻刻・解釈をして皆で意見を述べ合い、検討する形でおこなっている。古型付は現行型付と異なり独特の用語・記述法があり、解説は困難を極めた。しかし城介型付の用語データベースを作成、それを活用してそれぞれの曲中での用語の使い方を把握したうえで型の解釈をおこなった。さらに少進の型付・金春安照仕舞付・宗節仕舞付・岡家の型付等同時代の古型付や現行型付を参考にしながら解説を重ね、当時の舞がどのようなもので、それをどうというルールで記述しているのか研究を続けてきた。

このような研究会を重ねるうちに、解釈した型付を立体的に舞台上で見たい＝復元したいという思いに至った。そこで、城介が金春流の下間少進に能を習ったということからシテ方金春流井上貴覚氏と、文理融合の能の所作研究で、既にモーシヨンキャブチャアの撮影等で協力をいただいているシテ方観世流馬野正基氏に実演をお願いした。お二人の研究への理解と協力がなければ、今回の復元は実現できなかった。あらためて感謝を申し上げたい。

当日は、曲ごとに①担当者が現行と復元で異なる部分等を説明、②現行→復元の順で実演、③担当者と演者でどうしてこのような型を選択したのか、工夫した点などを説明するという進め方をした。

約九十名の参加があり、会場からさまざまな意見をいただいた。二時間少々で四曲の解説・実演は詰め込みすぎであるとの意見や、現行の型にとらわれすぎているのではないかという指摘も受けた。

実は現在も研究会を継続させており、これらの意見も参考にして今後も復元の試みをおこなっていきたいと考えている。この企画にあたっては詳細な資料を作成したので、以下に当日配布した資料を掲載する。なお当日配付資料の明らかな誤り等は適宜、訂正した。

(中司由起子)

## ワークシヨップ

### 「江戸初期型付に基づく実験的復元」

十一月十五日(木)六時～八時半、銀仙会能楽研修所

司会 山中玲子

中司由起子

一八〇〇 全体説明

一八一〇 〈千手〉クセ

井上貴覚 地謡 辻井八郎

(復元 中司由起子)

一八三〇 〈自然居士〉クセ

馬野正基 地謡 長山桂三

(復元 江口文恵)

一八五〇 クセの討議

一九〇五 休憩

一九一五 〈田村〉キリ

井上貴覚 地謡 辻井八郎

(復元 深澤希望)

一九三五 〈山姥〉キリ

馬野正基 地謡 長山桂三

(復元 柳瀬千穂)

一九・五五 キリの討議

二〇・一〇 全体の討議と質疑応答

出演者全員

\*本講座は、科学研究費補助金による基盤研究(B)「能楽型付」資料の全国的調査と、技芸伝承におけるその役割についての総合的研究」の研究成果の一部です。

\*本日の実演は、復元した型付と多少異なる場合がございます。あらかじめご了承ください。

### 【本日取り扱う型付資料について】

秋田実季筆「謡本」(東北大学附属図書館蔵)三冊、三八曲所収。包紙「御筆か／御謡本」、表紙打付書に「謡本(上・中・下)」と記されている。内容は能の型付。稽古・相伝した年を注記する曲もあり、慶長十九年前後の年記が多く見られる。型付の内容はどの曲もむらなく詳細で、少進から稽古を受け、内容と「童舞抄」との比較や、金春大夫(安照)・虎屋立巴・池田備後守などの型も記す。また、挟み込み紙が数枚ある。なかには元和四年に「親世左近大夫暮閑」(九世)が城介に宛てた(高砂・芭蕉)の本ユリについて教示した書状などもある。東北大学附属図書館には「童舞抄」も所蔵されており、型付中に「童」と注記のある型はこれに拠ったものと考えられる。

### 【秋田実季について】

天正四年(一五六七)―万治二年(一六五九)

## 13 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

出羽檜山城主秋田愛季の第二子として生まれる。天正十九年正月豊臣秀吉に領地五万二千石を安堵と蔵入地二万六千石支配を命ぜられる。慶長七年（一六〇二）、常陸岡戸に転封、同年九月従五位下秋田城介となり、大阪兩陣にも参戦、秋田家中興の祖と仰がれた。寛永七年（一六三〇）、仕置の落度を理由に（真相不明）、伊勢朝熊（あさま）に謫せられ、万治二年（一六五九）十一月二十九日同地で死去。（以上、『国史大辞典』吉川弘文館、昭和五五年七月により抜粋引用。）本願寺の坊官で玄人跣の活躍をした、下間少進（一五五一—一六一六）に師事し、実季三十七歳の時に少進に宛てた慶長十七年六月二日付の起請文が現存する（鴻山文庫蔵『起請文帖』）。

## 【流儀による所作名称の違い】

・右手を上げながら前へ出、右手を上げて止まる。

## 【観世流】

サシ込ミ

金春流

指シ

・扇を持った右手を体の横から頭の上を通して、胸前で先へ出す。向こうを指している。

## 【観世流】

サシ

金春流

指シマワシ

## 【翻刻凡例】

一、できるだけ原体に近い字に翻刻する。旧字体は新字体に改めない。

一、一つ書き毎に改行し、まず本行の詞章を「」を付して記し、その詞章の直後に続けて傍書の型付等を記す。

一、前後の一つ書きに属さない、一つ書きではない記事は、その一まとまりで適当な位置に一段落取る。

一、読み易さを考慮し、適宜句読点を補う。（一つ書きの下にも点を補う）

一、濁点は原文に時折見られるので補わない。

一、曲名には「」を付す。内題にも、その下に情報がある場合の見易さを考慮して付ける。

一、書名には「」を付す。（例・「童」）

一、難読文字は■で示す。

一、ルビは当該語の直後に「」を付して示す。

一、詞章の直後の省略を表す縦一本線は、——（全角ダツシユ）を用い、「詞章——」と、「——」の中に入れて表す。

一、垂れ鉤は、（全角斜線）と表す。

一、「……して」「合掌」等を表す合字は片仮名、前後の表記により平仮名、漢字に開く。

一、丸印等の記号を用いた挿入記事は、訂正した形で記し、記号も原態に近い記号を用いて表記する。

一、見消すも訂正後の情報を記し、訂正前の文字を読み取ることが出来る場合は補注欄（以下参照）を設けて記す。

一、数文字分程度の空白は、詰めずにスペースを適宜用いて表す。



へ千手<sup>レ</sup>クセ

【翻刻(部分)】

中司 由起子

- 一、「今は梓弓」泣タル近所ニハ心シツメタル吉也。又フミテス、ム。静ニ也。或「よし力なし」ト云カラフミテ出ル。
- 一、「いつかたも」右ノ足ヲ引、身ヲ右ヘヒラキ、世中ヲ見ル心アリ。
- 一、「網を置たる」右ノ足ヲフミ出シ、扇ヲ左ヨリ右ヘアツカヒ、則右ノ足ヲ扇ニツレテヒラキ、ソレヨリス、ム。又、只静ニ歩ハカリモスル。
- 一、「しつミははてすして」ツレヲミル。
- 一、「名をこそなかせ」左ヘ廻ル。
- 一、「重房か手に」右ヘ扇引廻ス。
- 一、「心の外の都入」タイハイ。又タイハイノ心ナシニモ。
- 一、「実や世中ハ」上扇如常。
- 一、「定なきかな」挙。タイハイノ様ニスル。或タイハイシナカラノル。少ツ、也。不面白様ニスル。習也。
- 一、「衆徒の手に」身ヲヒラキ、正面ヲミル。無子細シナ也。或ツレヘムク。
- 一、「とにも角にも」ツレノ方ヘ少歩。
- 一、「又かま倉に」左ヘ廻ル。右歟。
- 一、「爰はいつくそ」正面ヘムキ合。前ヘ指ス。
- 一、「八橋の」ヒラキミル。
- 一、「とをたふミ」タイハイシテ、フミスユル。

一、「足からはこね」ス、ミ出ル。

一、「明もやすらん星月夜」少ヒラキ、先ヲミル。アマリ不高所也。在所ノ名ナル故ニ天ハ不見也。

一、「かま倉山に」又、右ヘ指テ廻ル。

一、「うき限そと」ノリナカラ右ヘヒラキ、先ヘ出也。或ハ重衡ヘムク。

一、「なるれハ爰も忍ねの」重衡ヲ指テヒラキミル。

一、「灯暗うしてハ」正面ヘムキ、扇ニテ一ツアフキ、ニツメニ右ヘ指テ廻ル。

一、「雨さへしきる」正面ノ天ヲミル。

一、「四面に楚歌の」扇、面ニアテス也。ワキニカマユル也。或如常、面ニアツルコトモ有。其時モ「四面」ト云文言ニ見渡ス心也。扇ワキニカマユル時モ同前也。

一、「何とかへす舞の袖」タイハイ、左タイハイニアタル様ニスル。或左右ヘノル。本ノタイハイニテハナシ。

一、「涙をそへて」指テ右ヘ廻リ、正面ヘムキ舞返ス。タイハイ。

一、「雪ふるえの」舞廻ス也。則タイハイ、謡長キ故ニ二ツ廻リテタイハイ仕タル吉。

千寿の曲舞 (挿紙)

一、「今は梓弓」よりフミテス、ム。静ニ也。

一、「重房か手に」ト云所ニテ、扇ヲ右ヘ引廻ス。

一、「外のミやこ入」ニテ、タイハイ。

## 15 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

- 一、「実や世中は」上ハ、ツネノコトク。  
 一、「定めなき哉」ニテ扇ヲ拳。タイハイ。  
 一、「衆徒の手に」身ヲヒラキ、正面ヲ見ル。無子細シナ也。  
 一、「又鎌倉」ニテ右ヘ廻ル。  
 一、「爰はいつくそ」ニテ前ヘ指。  
 一、「八橋の」ニテヒラキ見ル也。  
 一、「遠江」ニテフミスル。  
 一、「足柄箱根」ニテス、ミ出ル。  
 一、「星月夜」ニテヒラキ見ル。在所ノ名ナル故ニ、天ハ不見也。  
 一、「うき限そと」ニテ重衡ヘムク。  
 一、「爰も忍び音」ニテ重衡ヲ指テ、ヒラキ見ル。  
 一、「燈暗してハ」ニテ正面ヘムキ、扇ニテ一ツアフキ、二ツメニ右ヘ指テ廻ル。  
 一、「雨さへしきる」ニテ正面ノ天ヲ見ル。  
 一、「四面に楚歌」ニテ扇、面ニアテス也。ワキニカマユル也。  
 一、或如常、面ニアツル事モアリ。其時モ「四面」ト云文言ニ見ワタス心也。扇、ワキニカマユルトキモ同前也。  
 一、「何とか返す舞の袖」ニテ、タイハイ。左タイハイニアタル様ニスル也。  
 一、「涙をそへて」ニテ指テ右ヘ廻リ、正面ヘムキ、舞返ス。  
 一、「雪のふるえの」ニテ舞廻ス也。則タイハイ、謡(長\*)キ故ニ、二ツ廻リテ、タイハイ仕タル吉。  
 右、元和元年八月於京都、少進法印二習也。

曲舞ノ前後ハ童舞抄ヲ用ル也。

\*「長」が脱落か

## 【実験的復元】

(詞章は「金春流仕舞型附」初級用(金春円満井会出版部)による)

(扇閉ジタママ)

《地》\今は梓弓

大小前ヨリ正ヘ出

よし力なし重衡も

右ヘネジ(世中ヲ見ル心)

ひかんとするにいづ方も

右足一足出ナガラ、ウラ指シマワシ、正ヘネジ、左下目ヲ指ス

網を置きたるごとくにて

静カニ扇左ヨリ右ヘアツカイ

のがれかねたる淀鯉の

右ヘ廻リ(手下ス)、大小前ニテ正ヘ一足出ナガラ指シマワシ、左右、仕止メ

生捕られつつ川越の、重房が手にわたり

扇ヒロケ

心のほかの都入り

上羽

《シテ》\げにや世の中は

大左右

《地》\

定めなきかな神無月

正先へ打込ミ

時雨降りおく奈良坂や

指シヒラキ(正面ヲ見ル)

衆徒の手にわりなば

右へネジ、重衡方(脇座)へ三足出ル

とにもかくにもはてはせで

左へ廻リ

またかまくらにわたさるる

大小前ニテ正へネジ、一足出、指シヒラキ(正面ヲ見ル)

ここはいづくぞ八つ橋の

左右、仕止メ

くもいのみやこいつかまた

拍子「お」(右)・「う」(左)

三河の国や遠江

正先へ出、指シ

足柄箱根うち過ぎて

ヒラキ(正ヲ見ル、余リ高クナラズ)

明けもやすらん星月夜

指シマワシ、右へ廻リ(手下さ)

鎌倉山に入りしかば

正中ニテ重衡方(脇座)へ向キ、一足出

憂き限りぞと思いに

指シ

馴るればこことも忍びねに

ヒラキ

哀れ昔を思い妻の

正へネジ、マネキ扇一ツ、二ツメニテ指シマワシ、右へ廻リ

灯暗うしては数行虞氏が涙の

大小前ニテ正へ出(正面ノ上ヲ指ス)

雨さえしきる夜の空

常ノカマエニ直シナガラ謡ウ(足引カズ)

(シテ)四面に楚歌の声の内

大左右

拍子「そ」(左)

(地)何とか返す舞のそで

正へ一足出、指シマワシ

思いの色にや出でぬらん

右へ廻リ、大小前ニテ指シ返シ

涙をそえてめぐらすも

角へ行

角トリ、カザシ

雪のふるえの枯れてだに花咲く

左へ廻リ

千手の袖ならば

大小前ニテ左右、仕止メ

重ねていざや返さん

〈自然居士〉クセ

江口 文恵

【翻刻(部分)】

少：下間少進相伝の型→ゴシック体

金：金春大夫の型→教科書体

少進・金春、どちらの型かの明記のない型、および

「少・金同」とある型→明朝体

復元に採用した箇所→傍線を引く。

一、「黄帝の臣下に」、少、少ワキ正面へ歩。

一、「池の面を見渡せハ」、少、右へ扇指廻シ、ヒラキ、ミル。  
金、左へヒラキ、大臣柱ノ方ヲ見テ歩。

一、「さむき嵐にちる柳の」、少、左足ヲフミ出シテ、高クミテ、散ヲ目ヲ付テ、下へ見ル。扇ニテ下ヲ指。右へヒラク扇也。ヲツル所ハ真中也。金、右へヒライテ上ヲミル。

一、「一葉水に」、少、ヒラキ、下ヲミル。

一、「また蛛といふ虫」、少、右へ身ヲヒラキ、ミル。

一、「虚空におちけるか」、少、真中ノ落葉ノ所ヲミル。金、右へヒラキ、扇ヲ高ク指テ下ヲミル。

一、「その一葉の上のりつ」、少、前へ扇指テ、足ヲモノル心にツカフ。少也。金、〈清経〉ノ舟ニノル心。下ヲ指、サソク。

一、「次第次に」、少、又右へヒラキ、ミテ、頓而左へ廻。  
一、「いとはかなくも柳のはを」汀によりし、少、ノリナカ

ラ右へ身ヲ出テ、葉ヲ指ス。前へヒラキ、ミル。

一、「立くる蛛の」つくれり、(冒頭)少、タイハイ。

(末尾)金、扇ヲ引テミル。

(挿入)一、「実もと思ひ」、金、タイハイ。

一、「黄帝是にめされて」、(右ワキ)金、足フミ。(左ワキ)ス、ミ、正面ヲミル。

一、「烏江をこき渡りて」、少、右へ扇ヒラキ、見テ、右へ廻ル。

一、「御代を治め給ふ事一万八千歳とかや」少、カタタイハイ、ヒラキ、ヨセイ也。金、右へ指テヒラク。

一、「しかれば舟の」、(右ワキ)少、右ノ身ヲ出シテ、扇ヒロクル、如常。(左ワキ)扇挙ル。

一、「公にす、むと書たり」、少・金同。扇挙テタイハイ、ノル。

一、「扱また天子の御舸を」、少、正面ヲ指、ミル。

一、「龍舸と名付奉り」、少、左廻(この型、丸で囲む)。金、タイハイノ右ノ扇ヲ引、ヨセイ。

一、「舟を一葉といふ事も」、少、左へ廻。金、少ヒラク。指テキツト見、則右へ廻ル。

一、「君の御座舟を」、少、正面ヲ指テ、ヒラキ、ミル。

一、「龍頭鰐首と」、少、タイハイ。金、舞カヘシ、タイハイシナカラワキミル。

一、「此御代よりをこれり」、少、ワキハムキ合テ、指テ又ヒ



ラキ、ミル。

# 【実験的復元】

〔大小前〕「に」で（右足で）足拍子を一踏み、脇正面の方向へ数足歩く。  
〔地〕黄帝の臣下に、賁狄と云へる士卒あり。

右方向を扇でサシ、開、右方向を見る。

ある時賁狄庭上の。池の面を見渡せば。

左足をやや大きく出して、左上を見た後、柳の葉が散る様をじつと見るように、舞台正先を見て、徐々に頭を落とし、扇で指しながら正先下を見る。

折節秋の末なるに、さむき嵐に散る柳の、

開、下を見る。

右ウケ（見る）。

一葉水に浮かみしに。

また蜘蛛と云ふ虫。

正面へ直し、柳の葉が落ちたところ（正先下）を見る。

これも虚空に落ちけるが

前へ扇でサシ込、「のりつつ」の「の」「り」で右・左と足拍子。

そのひと葉の上に乗りつつ。

右ウケ（見る）。

次第次第にさがにの。

半開の様に体をねじって左方向へ向き、左へ廻り、大小前あたりまで行く。（正へ直す）

いとほしくもなくも柳の葉を。吹き来る風に誘はれ。汀に寄りし秋霧の。

足フミをしながら右ウケ、柳の葉のあたり（正先下）を指す。  
立ち来る蜘蛛の振舞

左右打ち込み、開。

げにもと思ひ初めしより。工みて舟を造れり。

正面へ進み、前を見る。

黄帝これに召されて

扇を出しながら右ウケ（見る）。右へ回る。

烏江をこぎ渡りて、蚩尤を易く亡ぼし。

片左右、開。扇を広げる。

御代を治め給ふ事。一萬八千歳とかや。

（正中で）上ケ扇。

（シテ）しかれば船のせんの字を

大左右、足拍子。

〔地〕公にすすむと書きたり。

正面へサシ込開、正面を見る。

さて又天子の御舸を、龍舸と名づけたてまつり。

左に廻る。

舟を一葉と言ふ事 この御宇より始まり。

正面へサシ込開、正面を見る。

また君の御座船を。

左右。

龍頭鶴首と申すも

（地謡前の）ワキと向き合い、サシ込開、ワキの方を見る。

この御代より起これり。

〔田村〕キリ

深澤 希望

〔翻刻(部分)〕

一、「知方といひし」漸々此文言ノ時分ヨリ正面ヘムキ直ル也。

一、「ましてや」扇ニテ正面ヲ前ヘ指也。入精也。

一、「あの、松原村立」右ヘヒラク也。橋懸ノ松ナトヲ指タル吉。

一、「鬼神ハ黒雲」天ヲ見ナカラ左ヘ大ニ廻ル。

一、「山のこづくにみえたる」橋ノ方ヘムキ、右足ヲフミコミ、又右ヘヒラク、扇ヲヒロケカサシ遠見ル也。

一、「あれをみよ」急度正面ヘムキ、扇ニテ指テ見ル也。

一、「ふしきやな味方の軍兵の」指タル扇ヲ引テ、見、正面ヘス、ム也。キライタル心持吉。

一、「千手観音の光を」右ヘ扇ニテ指マハシテ、見、又引テ見ル。

一、「虚空に飛行」又指廻ス様ニして、右ヘ廻リ、正面ヘムキス、ム。

一、「千の御手毎に」扇ヲ真中ヘヨセ、左右ノ手ニテタテニ持。フミスユルツヨミ也。


一、「大悲の弓にハ」右手ヲ放、弓ト心得、則左ヘ廻ル也。

一、「一度はなせハ千の矢先」扇ヲカナメヲ先ニして、左方ヘ遣ナカラ、則左足ヲ扇ニ添テ、サソクニテ使也。舞ノ内ノ四段目ノ頭ノ取カヘス扇ヲ遣様也。

一、「雨霞とふりか、つて」初二左ヘ遣タル扇ヲ高上テ、右ヘ取返シナカラ、文言ニ合テ、右ヘ廻ル也。ワキ正面ヘムキタル時分ニ、右ヘトル程吉歟。

一、「鬼神のうへに乱落」正面ヘムキ合、正面ヲ見テ、「乱落レハ」ト文言ニ合テ、扇ヲ如常右ノ肩ノ上ニテ取直シナカラ、左ヘ廻ル也。左右ヘノサソク肝要也。畢竟四段目ノカシラノ扇アツカイ也。

一、「鬼神ハ不残うたれにけり」橋懸ノ方ヘムキ、右足ヲフミコミ、頓而引テ、又フミ出シテ一ツ足フミスル也。ツヨミニフミツクルト同ク、扇ヲヒラメテ、「うたれにけり」ト云文言ニ合テ、打様ニスル。爰ニテハ、打仕舞セスして、末ノ「カタキハホロヒニけり」ト云所ニテ、如此ノ仕舞スルモ吉。

一、「有かたし／＼しや誠に呪咀諸毒」早正面ヘムキ合テ、合掌して、ノル足フミヲして、正面ヘス、手ヲ直ス也。

一、「葉念被観音」正面ヲ見入テ、ヨセイアリ。

一、「則還着於本人」左ヘ大ニ廻ル也。面ヲ残イキ／＼トシタル心持吉。

一、「則還着於本人」同小廻ル也。

一、「ほろひにけり」初ノ小廻ヨリ、橋懸ノ方ヘムキタル時、右足ヲフミ出テ、又引テ、フミツクル也。爰ニテ右足ヲフミ出テ、フミツクルト一度ニ、扇ヲヒラメテ打様ニスルモ吉。爰ニテ其仕舞セハ、初ノ「かたきハうたれにけり」ニ

テハ唯足フミトヨセイハカリ吉。同仕舞二度ハ悪シ。合掌ハ二度モ不苦。

一、「是観音の」正面へ急速ニムキナカラ、合掌して正面ヲミル。

一、「仏力なり」右へ身ヲヒラキ、ワキ正面へ急速ニムキ、合掌ヲヒラキ、足フミして仕留也。

### 【実験的復元】

〔詞章は「金春流仕舞型附」月ノ巻（金春円満井会、平成二十年）による。〕

扇トジタママ、大小前ニテ、正面向キ立。

〈シテ〉／＼千方といつし逆臣に。仕えし鬼も。王地を侵す天罰にて。

千方を捨つればたちまち亡び失せしぞかし。

一足出、指シヒラキ（精ヲ入レテ）  
足拍子（左・右）

ましてや間近き鈴鹿山。〈地謡〉／＼ふりさけ見れば伊勢の海。

正先へ出ル。左手指廻シ左へネジ。

ふりさけ見れば伊勢の海。

指シ分ケ、橋掛見流ス

阿濃の松原むらだち来たつて。

高ク見ナガラ、正先カラ左へ大キク廻ル（脇前受ケズ）。

鬼神は。黒雲鉄火をふらしつつ。数千騎に身を変じて

正中ニテ橋掛へ向キ止マリ、改メテ一足出指シ、右半身ヒラキ、扇ヒロ

ゲ天ノ扇。

山の。ごとくに見えたる所に。

キツと正面へネジ、一足出指シ、見ル。

〈シテ〉／＼あれを見よふしぎやな。〈地謡〉／＼あれを見よ

右半身ヒラキ、正へ面切ル。半身ノママ正先へ出ル（キヲイタル心持）。

ふしぎやな。味方の軍兵の旗のうえに。

右へ指廻シ、角向キ、ヒラキコミ、見ル。

千手観音の。光をはなつて

指廻シ、右へ廻り、大小前ニテネジ、正先へ出ル。

虚空に飛行し。

扇ヒライタママ縦ニ両手ニテ持チ、足拍子（右）強く。

千のみ手ごとに。

右手ヲ放シ、左へ廻リ（扇弓ト心得、脇前受ケ、常座へ行。

大悲の弓には。知恵の矢をはげて。

常座ニテ脇方へ強く羽根扇一ツシ、面切、脇方へ出。

ひとたび放てば千の矢先。

右ニネジナガラ、扇水平ニ頭上ニカカゲ（袖カムル型ノ如ク）二段目扇ニ

取直シナガラ右へ廻ル。

雨あられと降りかかつて。

大小前ニテ一足大構エ出ル。左へ廻リナガラ扇常ノ如ク持チ直シ、脇前

受ケ、正中へ出ル。

鬼神の勢に乱れ落つれば。ことごとく矢先にかかつて

正中ニテ橋掛向キ、右足ヲ踏ミ止メ、スグニ右足引キ、改メテ右足踏出

シ（左半身）、足拍子（右）一ツ（強く）踏ム時、扇平ラニ指シ、打ツ。

鬼神は残らず討たれにけり。

## 21 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

早く正へネジ、扇トジ、合掌（一足引）、足拍子、正へ出、合掌ノ手ヲトク。

有難し有難しや真に呪咀諸毒。

正へ一足出、見ル（ヨセイアリ）。

葉念彼。観音の力を合わせて

左へ大キク廻リ（脇前受ケズ）、常座へ行。

すなわち還着於本人

常座ニテ小廻リ

すなわち還着於本人の。

小廻り橋掛向キ止マリ、左右ト出、右足引キソロエ足拍子（右）。

敵は亡びにけり

正面へキツトネジ、合掌、正ヲ見。

これ観音の

脇正面へキツトネジ、合掌ノ手ヲトキ、留拍子（右・左）。

仏力なり。

へ山姥キリ

【翻刻（部分）】

一、「帰る山の」正面へ直シテ立。杖ヲ捨扇ヲヌク。

一、「春ハ梢に―」正面ヲ見ル。

一、「花を尋て山廻り」少面ヲ残シテ左へ廻ル。

一、「秋ハさやけき―」右へ扇指テ見付ヘス、ム。

一、「月みるかたにと」右足引テ空ヲ見ル。

柳瀬 千穂

一、「山廻り」指テ右へ廻ル。

一、「冬ハさえ行―」正面へムキ右ノ方へ扇指テ、

一、「雪をさそひて山廻り」扇ヲカサシテ廻返ス。

一、「廻りく／＼て輪廻を離れぬ」左へ又一ツ廻ル。

一、「妄執の雲の」ツレへ扇ヲ指出ス程ニ廻ル。

一、「塵積つて」右へヒラキ右ノヒサヲツキ、扇ヲ頭ヘカツ

ク。ツフリヘアタル程ニ。又、只ヒラキテモ見ル。是ハタ

ケタル也。

一、「山姥となれる」ツレへ袖ト扇ヲアツカイ、ムキミル。

左ダイハイノ如ク。

一、「鬼女カ有さま」立ス、ム。

一、「みるやく／＼と」右へ扇ヲ指テ正面ヘス、ム。左足ヲ出。

一、「嶺にかけり」左へ引テ右ヲフミチカヘテ下ヲミル。扇

ムネヘヨセス。

一、「谷にひゝきて」右へ臥シテ扇ヲカツキ上ヲミル。<sup>サシテ</sup>

一、「今迄爰に―山又山に―」立、面ヲ残シテ左へ廻ル。

一、「山廻り山又山に―」スハリ所ノ順へ行、扇ヲ猶改テ出

シテ少キヲフ。

一、「山廻りして」右へ猶指テ右へ廻リ居座へムキタル時、

扇左ヘトリ、又一ツ廻リ右ヲ臥カフル。

一、「なりにけり」或ハ左へ廻モトリテモスル。（阿古木）ノ

コトクモ。



## 【実験的復元】山姥キリ

(詞章は「観世流大成版仕舞型付」(檜書店)による。)

常座で扇を開き持ち、立つ。

〈シテ〉／＼暇申して。帰る山の

角へ行き角取りし、正面を向く。

〈地〉／＼春は梢に咲くかと待ちし

正面に向けた顔を暫くそのままにしながら左へ回り、大小前へ行く。

〈シテ〉／＼花を尋ねて。山廻り

正面を向きながら角の方を指し、角へ行く。

〈地〉／＼秋はさやけき影を尋ねて

小角で右足を引き半身になり、上の方を見、指して右へ回り、正中へ行く。

く。

〈シテ〉／＼月見る方にと山廻り

正面を向きながらやや右の方を指し、角へ行く。

〈地〉／＼冬は冴えゆく時雨の雲の

扇を下からかざし、左へ回り、大小前へ行く。

〈シテ〉／＼雪を誘ひて。山廻り

左へやや大きく回る。

〈地〉／＼廻り廻りて。輪廻を離れぬ。

左へもう一度やや小さく回り、ツレへ二足詰め指し込み、

妄執の雲の。

開き、下居しながら扇を外し、頭上へかづく。

塵積もって。

左袖と扇をあしらいつレの方を向く。

山姥となる。

立ち、ツレの方へ進む。

鬼女が有様。

ツレの前で止まり、右の方を指し正先へ進む。

見るや見るやと。

正先で両手を組まずにソリ返り、正面向き下居。

峯に翔り。

扇を外して上からかざし、上を見る。

谷に響きて

立ち、正面を暫く見ながら、左へ回り大小前へ行く。

今まで此処に。あるよと見えしが山また山に。

小回りして指し込み。

山廻り。山また山に。

右へ回りながら扇を左手に取り常座へ行き、右へ小さく回りながら下居

し、枕扇。

山廻りして。行方も知らず。なりにけり

## 【出演者紹介】

## ◆井上貴覚

能楽シテ方金春流。金春信高、金春安明及び仙田理芳に師事。

1996年(簞)にて初シテ。2007年(道成寺)を披く。

1998年、高橋忍・辻井八郎・山井綱雄と共に「座・

SQUARE」を結成。

## 23 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

## ◆辻井八郎

能楽シテ方金春流。金春信高及び金春安明に師事。1979年(猩々)にて初シテ。2001年(道成寺)を披く。1998年、高橋忍・山井綱雄・井上貴寛と共に「座・SQUARE」を結成。

## ◆馬野正基

能楽シテ方親世流。鏡仙会所属。父馬野義男及び河村隆司・八世親世鏡之丞・九世鏡之丞に師事。1972年(猩々)にて初シテ。2002年(道成寺)を披く。2007年、ワキ方下掛り宝生流の館田善博、笛方藤田流竹市学、狂言方大蔵流の山本泰太郎・則孝と「三聲会」を結成。

## ◆長山桂三

能楽親世流シテ方。鏡仙会所属。父長山禮三郎及び八世親世鏡之丞・九世鏡之丞に師事。1996年(花月)にて初シテ。2009年(道成寺)を披く。

## 【発表者紹介】

## ◇中司由起子

法政大学能楽研究所兼任所員。法政大学大学院博士課程満期退学。主な論文に「型付における「回ル」―能楽型付の記述ルールの研究(2)」「能楽研究」35・2011など。

## ◇深澤希望

法政大学大学院博士課程。主な論文に「能(道成寺)乱拍子の伝承をめぐる一考察―金春大夫家と小鼓幸家の関わりを中心

に―」(「法政大学大学院紀要」69・2011)など。

## ◇江口文恵

法政大学能楽研究所兼任所員。早稲田大学大学院博士課程修了。博士。主な論文に「親世小次郎元頼の領地安堵―親世新九郎家文庫蔵織田信長朱印状以前とその後―」(「能楽研究」34・2010)など。

## ◇柳瀬千穂

法政大学大学院博士課程。主な論文に「作品研究(石橋)試論―趣向と構成について―」(「親世」74・12・2007)など。

『秋田城介型付』 金：金春大夫の型 →一部採用 (下線を引く)	復元	備考
	(大小前)「に」で右足で足拍子を一踏み、脇正面の方向へ数足歩く	大小前に立ってスタート (参考)『少進能伝書』:「黄帝の臣下に、賁狄ト」いふより、そろそろさきへ出る。
		3の動きを始める
左ヘヒラキ、大臣柱ノ方ヲ見テ歩。	右方向を扇でサシて開、右方向を見る	指廻し＝観世の「サシ」 (参考)『少進能伝書』:「池の面を見渡せば」正面ノ下ヲミる。
		正面へ直したあと、5の動きへ入る (参考)『少進能伝書』:「折ふし秋の末なれば」ちと左の方ノ上ヲミ、
右ヘヒライテ上ヲミル。	左足を大きめに出して、左上を見た後、柳の葉が散る様子をじっと見るように、舞台正先を見て、頭を下に下げること、徐々に視線を落とすようにし、扇で指しながら正先下を見る	柳の葉が落ちる様を見る所作 真中＝正先を設定
	開、下を見る	(参考)『少進能伝書』:「一葉水に」と下ヲミル。
	右ウケ(見る)	右ヘヒラキミル＝右ウケ (参考)『少進能伝書』:「また蛛といふ虫、是も虚空ニ」、右之上ヲミ、
右ヘヒラキ、扇ヲ高く指テ下ヲミル。	正面へ直し、落葉のあたり(正先下)を見る	落葉を見る所作、2回目
〈清経〉ノ舟ニノル心。下ヲ指、サソク。	正面へサシ込、「のりつゝ」の「の」「り」で右・左と足拍子。開	(金春大夫の型)サソク＝細かな足づかい
	右ウケ(見る)、すぐに左へ回る	右ウケのあと、半開の様に体をねじってから、左へ回る

## 25 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

## 〈自然居士〉クセ

番号	詞章	(参考) 観世流大成版仕舞型 付	『秋田城介型付』 少：下間少進の型 →基本採用 (一部不採用の箇所あり)
1	黄帝の臣下に 賁狄と云 へる士卒あり	立 「あ」左拍子	(「に」右横●)少ワキ正面 へ歩。
2	ある時賁狄庭上の	右ウケ	
3	池の面を見渡せば		右へ扇指廻シ、ヒラキ、ミ ル。
4	折節秋の末なるに	正へ直シ	
5	寒き嵐に散る柳の	正へ出 下へトリ サシ込開	左足ヲフミ出シテ、高クミ テ、散ヲ目ヲ付テ、下へ見 ル。扇ニテ下ヲ指。右へヒ ラク扇也。ヲツル所ハ真中 也。
6	一葉水に浮かみしに	「し」左拍子	ヒラキ、下ヲミル。
7	また蜘蛛といふ虫	右へ回り 大小前ヨ リ正中へ出	右へ身ヲヒラキ、ミル。
8	これも虚空に落ちけるが	サシ込開 上ヲ見	真中ノ落葉ノ所ヲミル。
9	そのひと葉の上に乗っ つ	右ウケ正へノリ込拍 子(「の上」拍子ニツ) 開	(「の」右横●、「り」左横 ●)前へ扇指テ、足ヲモノ ル心にツカフ。少也。
10	次第次第にさがにの	半開ノ様ニシテ角へ 行	又右へヒラキ、ミテ、頓而 左へ廻。



	(左へ廻り、大小前へ行き、)足フミをしながら右ウケ、柳の葉のあたり(正先下)を指す。正面へ直す	落葉の辺りを指す型あり 10の続きで左に回るため、ここで記される動きは、12の「立ち来る蜘蛛のふるまひ」にかかる。足フミのタイミングは任意
		続きで11の型を行う。「タイハイ(=左右打込)」が少進の型のタイミングでは間に合わないため、下の13の金春大夫の型のタイミングを採用。
タイハイ	左右打込	金春大夫の型、採用箇所
扇ヲ引テミル。	開	
足フミ。	正面へ進んで前を見る	
	扇を出しながら右ウケ(見る)、右へ回る	
	(続きで右へ回る)	16の続きで右へ回る
右へ指テヒラク。	片左右。開。扇を広げる	カタタイハイ=片左右 「ヨセイ」、復元メモ参照。ここでは一万八千年も御代が続いたのだなあ、としみじみした様子をかもし出す、か。 19の上ゲ扇の準備で扇を広げる。
扇拳ル。 (少・金の区別不記だが、少進の型は左の通り別に記述があるので、金春大夫の型と判断)	(正中で)上ゲ扇	
(少・金同)扇拳テタイハイ、ノル。	上ゲ扇のあと、大左右、足拍子	足拍子のタイミング、任意。
	正面へサシ込開、見る	
タイハイノ右ノ扇ヲ引、ヨセイ。	左へ回る	少進の型「左廻」を丸で囲む
少ヒラク。指テキツト見、則右へ廻ル。	(前の続きで)左へ回る	復元で回り始めるのはこのあたりからの予定
	(続きで左へ回り、大小前へ)	前の続きで回る

## 27 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

11	いとはかなくも柳の葉を 吹き来る風に誘はれ 汀 に寄りし秋霧の	右へ小サク回り 角 トリ 左へ回り	ノリナカラ右へ身ヲ出テ、 葉ヲ指ス。前へヒラキ、ミ ル。
12	立ち来る蜘蛛のふるまひ	大小前ヨリ正中へ出 サシ込開	タイハイ。
13	げにもと思ひ初めしより	左右	
14	たくみて舟をつくれり	打込 開	
15	黄帝是にめされて	正へ直シ	ス、ミ、正面ヲミル。 (少・金の区別不記だが、 金春の型は右の通り別に記 述があるので、少進の型と 判断)
16	烏江をこぎ渡りて	右へ回り	右へ扇ヒラキ、見テ、右へ 廻ル。
17	蚩尤を易く亡ぼし	正中ニテ正へ開	
18	御代を治め給ふ事 一万 八千歳とかや	サシ回シ開 片左右 打込 扇広ゲ	カタタイハイ、ヒラキ、ヨ セイ也。
19	しかれば船のせんの字を	上扇 開	右ノ身ヲ出シテ、扇ヒロク ル、如常。
20	公にすすむと書きたり	大左右 「き」 左拍 子	(少・金同)扇拳テタイハイ、 ノル。
21	さてまた天子の御舸を		正面ヲ指、ミル。
22	龍舸と名づけ奉り	正先へ打込 開	左廻。
23	舟を一葉といふこと	サシ回シ 開	左へ廻。
24	この御宇より始まれり	右へ回り	

	(大小前)正面ヘサシ込開、正面を見る	(参考)『少進能伝書』:「又君の御座舟」といふ時、正面ヲミル。
舞カヘシ、タイハイシナカラワキミル。	左右	
	(地謡前にいる)ワキと向き合い、ワキの方ヘ向かってサシ込開、ワキを見る	現行の能の型と同じく、立ったままトメ (参考)『少進能伝書』:「此御代ヨリ」ト脇ヲ見ル。

秋田城介型付翻刻 (挿紙 元和元年八月)	復元	備考
フミテス、ム。静ニ也。	大小前ヨリ正ヘ出	
	右ヘネジ(世中ヲ見ル心)	右足引き、右ヘ向くこと
	右足一足出乍ラウラ指シマワシ 正ヘネジ 左下目ヲ指ス	扇アツカイ→「網を置きたる」
記述ナシ		観世流は「遁れかねたる淀鯉の、生捕られつつありて憂き、身を鱗類のそのままに、沈みは果てずして、名をこそ流せ川越の、重房が手に渡り」とある
記述ナシ		
扇ヲ右ヘ引廻ス。	静カニ扇左ヨリ右ヘアツカイ 右ヘ廻リ(扇下シ)	実演は少し前の詞章から開始。 右ヘ引廻ス=右方向ヘ
タイハイ。	大小前ニテ正ヘ一足出乍ラ指シマワシ 左右 仕止メ 扇ヒロゲ	左右の前の動きのこと
上ハ。ツネノゴトク。	上羽	

## 29 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

25	また君の御座舟を	常座ヨリ正ヘサシテ 角ヘ行キ	「君の御座舟を」、正面ヲ指 テ、ヒラキ、ミル。
26	龍頭鷗首と申すも	扇カザシ左ヘ回り	タイハイ。
27	この御代より起これり	大小前左右打込 下 居トメ	ワキヘムキ合テ指テ又ヒラ キ、ミル。

## 〈千手〉クセ

	詞章(金春流)	現行 (金春流仕舞型附)	秋田城介型付翻刻 (元和元年七月)
1	今は梓弓		泣タル近所ニハ心シヅメタル吉 也。又フミテス、ム。静ニ也。 或「よしかなし」ト云カラフミ テ出ル。
2	よしかなし重衡も		
3	ひかんとするに	立	
4	いず方も	拍子「た」(左)	右ノ足ヲ引。身ヲ右ヘヒラキ、 世中ヲ見ル心アリ。
5	網を置きたるごとくに て	正ヘ三足出 指ヒ ラキ	右ノ足ヲフミ出シ。扇ヲ左ヨリ 右ヘアツカヒ、則右ノ足ヲ扇 ニツレテヒラキ、ソレヨリス、 ム。又只静ニ歩バカリモスル。
6	のがれかねたる淀鯉の		
7	生捕られつつ川越の	拍子「え」(右)	
8	ナシ	ナシ	ツレヲミル。
9	ナシ	ナシ	左ヘ廻ル。右蹴。
10	茂房が手にわたり	左右 仕止メ 扇 ヒロゲ	右ヘ扇引廻ス。
11	心のほかの都入り		タイハイ、又タイハイノ心ナシ ニモ。
12	げにや世の中は	上羽	上扇如常。



扇ヲ拳。タイハイ。	大左右 正先へ打込ミ	タイハイ＝左右・打込
身ヲヒラキ、正面ヲ見ル。無子細シナ也。	指シヒラキ(正面ヲ見ル)	身をひらき
	右ヘネジ、重衡方(脇座)ヘ三足出ル	
右ヘ廻ル。	右ヘ廻リ	右ヘ回ル方と解釈
前ヘ指。	大小前正ヘネジ 一足出	
ヒラキ見ル也。	指シヒラキ(正面ヲ見ル)	
フミスユル。	左 右 仕 止 メ 拍 子 「お」(右)・「う」(左)	左右が入る
ス、ミ出ル。	正先へ出	
ヒラキ見ル。在所ノ名ナル故ニ、天ハ不見也。	指シ ヒラキ(正ヲ見ル・余り高クナラス)	
	指廻シ 右ヘ廻リ(手下ス)	
重衡ヘムク。	正中ニテ重衡方(脇座)ヘ向キ一足出	挿紙の所作を採用
重衡ヲ指テ、ヒラキ見ル。	指シ ヒラキ	
正面ヘムキ、扇ニテツアフギ、二ツメニ右ヘ指テ廻ル。	正ヘネジ マネキ扇一ツニツメニテ指廻シ 右ヘ廻リ	現行と異なる所作

## 31 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

13	定めなきかな神無月	大左右	挙。タイハイノ様ニスル。或タイハイシナガラノル。少ヅ、也。不面白様ニスル。習也。
14	時雨降りおく		
15	奈良坂や	正先へ打込ミ 指ヒラキ	
16	衆徒の手にわたりなば	シサリ 右受ケ一足引キ乍ら正へ指廻シ出 ヒラキ	身ヲヒラキ、正面ヲミル。無子細シナ也。或ツレヘムク。
17	とにもかくにもはてはせで		ツレノ方へ少歩。
18	また鎌倉にわたさるる	右へ廻り大小前へ行	左へ廻ル。右蹴。
19	ここはいづくぞ		正面ヘムキ合。前へ指ス。
20	八つ橋の	正へヒラキ込ミ	ヒラキミル。
21	くもいのみやこいつかまた	六拍子	
22	三河の国や遠江		タイハイシテ、フミスユル。
23	足柄箱根うち過ぎて	脇正方へ二足出	ス、ミ出ル。
24	明けもやすらん星月夜	巻指シ(左へネヂ一足引)正先へ出	少ヒラキ、先ヲミル。アマリ不高所也。在所ノ名ナル故二天ハ不見也。
25	鎌倉		又右へ指テ廻ル。
26	山に入りしかば	ヒラキ	
27	憂き限りぞと思ひしに	右へ廻り中程ニテ指廻シ 角へ行	ノリナガラ右へヒラキ、先へ出也。或ハ重衡ヘムク。
28	馴るればここも忍びねに		重衡ヲ指テヒラキミル。
29	哀れ昔を思い		
30	妻の	角トル時扇ニテ面ヲオホフ型ヲシ 左へ廻り(扇下シ)	
31	灯暗うしては		正面ヘムキ、扇ニテアフギ、ニツメニ右へ指テ廻ル。
32	数行虞氏が	大小前へ行	

正面ノ天ヲ見ル。	大小前ニテ正へ出(正面ノ上ヲ指ス)	手が上がったままであること
扇面ニアテヌ也。ワキニカマユル也。或如常面ニアツル事モアリ。其時モ「四面」ト文言ニ見ワタス心ナリ。扇ワキニカマユルトキモ同前也。	常ノカマエニ直シナガラ謡ウ(足引カス)	現行と異なる所作
タイハイ、左タイハイニアタル様ニスル也。	大左右 拍子(左) 正へ一足出	大左右のあと打込ナシ
指テ右へ廻り、正面へムキ、舞返ス。	指廻シ 右へ廻り 大小前ニテ指シ返シ	
舞廻ス也。則タイハイ。謡(長)キ故ニニツ廻リテ、タイハイ仕タル吉。	角へ行 角トリ カザシ 左へ廻り大小前ニテ左右仕止メ	

復元	備考欄
常座で扇開き持ち、立つ。	
角へ行き、角取りし、正面を向く。	

## 33 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

33	涙の	正へー足出指廻シ 右へー足出ナリニ 見流シ正へクリ込 ミ指ス	
34	雨さえしきる夜の空		正面ノ天ヲミル。
35	四面に楚歌の声の内	ヒラキ	扇面ニアテヌ也。ワキニカマユル也。或如常面ニアツルコトモ有。其時モ「四面」ト云文言ニ見渡ス心也。扇ワキニカマユル時モ同前也。
36	何とか返す	大左右	タイハイ、左タイハイニアタル様ニスル。或左右ヘノル。本ノタイハイニテハナシ。
37	舞のそで	拍子「そ」(左) (右へ出)	
38	思いの色にや出でぬらん	正先へ打込ミ 指 ヒラキ	
39	涙もそえて		指テ右へ廻り、正面へムキ舞返ス。タイハイ。
40	めぐらすも	右へ廻り中程ニテ 指廻シ 角へ行キ 扇カザシ 左へ廻 リ大小前へ行	
41	雪のふるえの枯れてだに花咲く		舞廻ス也。則タイハイ。謡長キ故ニニツ廻リテ、タイハイ仕タル吉。
42	千手の袖ならば	左右 仕止メル	
43	重ねていざや返さん		

## 〈山姥〉キリ

	詞章(観世流大成版)	現行 (観世流大成版仕舞型付)	秋田城介型付
1	(暇申して)帰る山の	立。常座へ行。	正面へ直シテ立。 杖ヲ捨扇ヲヌク。
2	春は梢に (咲くかと待ちし)	正向三足目カケ角へ行、 角トリ	正面ヲ見ル。



正面に向けた顔を暫くそのままにしながら左へ回り、大小前へ行く。	
正面を向きながら角の方を指し、角へ行く。	
小角で右足を引き半身になり、上の方を見、	
指して右へ回り、正中へ行く。	
正面を向きながらやや右の方を指し、角へ行く。	
扇を下からかざし、左へ回り、大小前へ行く。	
左へやや大きく回る。	現行観世流(『観世』昭和38年11月号所載型付)では「小廻り開キ両手をサシ分ケ両手を広げて」
左へもう一度やや小さく回り、ツレへ二足詰め指し込み、	
開き、下居しながら扇を外し、頭上へかづく。	
左袖と扇をあしらいツレの方を向く。	左ダイハイの「ダ」はもとの濁点。
立ち、ツレの方へ進む。	
ツレの前で止まり、右の方を指し正先へ進む。	
正先で両手を組まずにソリ返し、正面向き下居。	
扇を外して上からかざし、上を見る。	
立ち、正面を暫く向きながら、左へ回り大小前へ行く。	
小回りして差込み、	◇「(少)キヲフ」
右へ回りながら扇を左手に取り常座へ行き、右へ小さく回りながら下居し、枕扇。	現行観世流(『観世』昭和38年11月号所載型付)では「シテ柱にて小廻りし止める」

## 35 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

3	花を尋ねて山廻り	右ノ上見乍ラ左ヘ回り	少面ヲ残シテ左ヘ廻ル。
4	秋はさやけき(影を尋ねて)	大小前ヨリ正中ヘ出、	右ヘ扇指テ見付ヘス、ム
5	月見る方にと	雲扇	右足引テ空ヲ見ル。
6	山廻り	開	指テ右ヘ廻ル。
7	冬は冴えゆく (時雨の雲の)	サシテ角ヘ行き、右ヘ 小サク回り角トリ乍ラ	正面ヘムキ右ノ方ヘ扇指テ、
8	雪を誘ひて 山廻り	扇下ヨリ上ヘアゲ右ノ 上ヲ見、左ヘマワリ	扇ヲカザシテ廻り返ス。
9	廻り廻りて 輪廻を離れぬ	ワキ座ヨリ大小前ヘ行、 小回り	左ヘ又一ツ廻ル。
10	妄執の雲の	正ヘ開	ツレヘ扇ヲ指出ス程二廻ル。
11	塵積って	正中ヘサシツメ開	右ヘヒラキ右ノヒザヲツキ、 扇ヲ頭ヘカツク。 ツブリヘアタル程二。
12	山姥となれる	身ヲ引立テ	ツレヘ袖ト扇ヲアツカイ、 ムキミル。 左ダイハイノ如ク。
13	鬼女が有様	大左右	立、ス、ム。
14	見るや見るやと	正先ヘノリ込	右ヘ扇ヲ指テ正面ヘス、ム。 左足ヲ出。
15	嶺に駆けり	拍子(ね・に)、 右ヘ飛返リ正向	左ヘ引テ右ヲフミチガヘテ 下ヲミル。 扇ムネヘヨセス。
16	谷に響きて	下居乍ラ雲扇上ヲ見又 下ヲ見、	右ヘ臥シテ扇ヲカザシテ上 ヲミル。
17	今までここに (あるよと見えしが) 山また山に	立角ヘ行、 ワキ座ヨリ折返シサシ テ正先ヘ行	立、面ヲ残シテ左ヘ廻ル。
18	山廻り山又山に	大小前見込行、	スハリ所ノ順ヘ行、 扇ヲ猶改テ出シテ少キヲフ。
19	山廻りして (行方も知らず)なりに けり	小回り正ヘ開、 折込下居トメ	右ヘ猶指テ右ヘ廻り居座ヘ ムキタル時、 扇左ヘトリ、又一ツ廻り右 ヲ臥カブル。

復元	備考
扇トジタママ、大小前二、正面向キ立。	
一足出、指シヒラキ(精ヲ入レテ)。	
足拍子「勢」左●「海」右●	→【復元メモ】7参照 7「踏スユル」 8「返しより出、左ノ袖シテ」 『少進能伝書』によって補う。
正先へ出ル。 左手指廻シ左へネジ	
指シ分ケ、橋掛見流ス。	
高く見ナガラ、正先カラ左へ廻ル(脇 前受ズ)	
正中ニテ橋掛へ向キ止マリ、 改メテ一足出指シ、右半身ヒラキ、 扇ヒロゲ、天ノ扇。	「天ノ扇」(春)、「雲扇」(観)、 「引分ヒラキ」(宝)、「打上ヒラキ」(剛)、 「カザシヒラキ」(喜)

## 37 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

## 〈田村〉キリ

	詞章 (金春流)	現行(『金春流 仕舞型附』月ノ巻)	秋田城介型付
1	千方といっ し逆臣に	扇ヒロゲ	漸々此文言ノ時分ヨリ、正面ヘムキ直 ル也。
2	仕えし鬼も		
3	王地を侵す 天罰にて	立	
4	千方を捨つ ればたちま ち 亡び失せし ぞかし	脇正ヘシカケ出テ	
5	ましてや間 近き	打込ミ指シ	扇ニテ正面ヲ前ヘ指也。入精也。
6	鈴鹿山	ヒラク	
7	ふりさけ見 れば 伊勢の海	正ヘ直シ(一足引) 「勢」足拍子左●「海」 右●	
8	ふりさけ見 れば 伊勢の海	「さ」○「け」○ 「れ」○「ば」○右ヘ踏 ミ込ミ 「勢の」●—● 「海」左ヘネジ	
9	阿濃の	指廻シ	右ヘヒラク也。橋懸ノ松ナドヲ指タル 吉。
10	松原むらだ ち来たって	右ヘ廻リ地前ニテ指返 シ角ヘ出	
11	鬼神は黒雲	角取りカザシ	天ヲ見ナガラ左ヘ大ニ廻ル。
12	鉄火をふら しつつ	正高ク見左ヘ廻リ	
13	数千騎に身 を	脇前ニテ仕手柱方向キ 裏指廻シ (一足出左半身)	
14	変じて	右ヘ廻リ飛ビ	
15	山のごとく に見えたる	角向キ二下ニ居天ノ扇	橋ノ方ヘムキ、 右足ヲフミコミ、又右ヘヒラキ、 扇ヲヒロゲカザシ遠見ル也。



キット正面ヘネジ、一足出指シ、見ル。	
右半身ヒラキ、正へ面切ル。 半身ノママ正先へ出ル(キヲイタル心持)。	◇「キヲイタル心持」 〈山姥〉に「キヲフ」用例あり。
右へ指廻シ、角向キ、ヒラキコミ、見ル。	
指廻シ、右へ廻り、 大小前ニテネジ、正先へ出ル。	
扇ヒライタママ、縦ニ両手ニテ持ち、 足拍子(右)、強ク。	
右手ヲ放シ、左へ廻り(扇弓ト心得)、 脇前ウケ、常座へ行ク。	◇「弓ト心得」
常座ニテ、脇方へ強ク羽根扇一ツシ、 面切、脇方へ出。	「サソク」＝軽快な足さばき
右ニネジナガラ、扇水平ニ頭上ニカカ ゲ(袖カムル型ノ如ク)、 二段目扇ニ取直シナガラ、右へ廻ル。	《現行と復元の型の差異》 ★現行20～26千手観音の動き 現行27鬼神の動き ★復元20～27千手観音の動き
大小前ニテ、一足大構エ出ル。 左へ廻リナガラ、扇常ノ如ク持ち直シ、 脇前ウケ、正中へ出ル。	→【復元メモ】25～27参照 ・「舞ノ内ノ四段目ノ頭ノ取カヘス扇」 ・「四段目ノカシラノ扇アツカイ」

## 39 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

16	所に	正へ直ス	
17	あれを見よ ふしぎやな		急度正面へムキ、扇ニテ指テ見ル也。
18	あれを見よ ふしぎやな	立ち	指タル扇ヲ引テ、見、正面へススム也。 キヲイタル心持吉。
19	味方の軍兵 の旗のうえ に	正先へシカケ出左足引 半身ニクリ込ミ静カニ 下ヨリ指シ高く見	
20	千手観音の 光をはなっ て	体ヲ直シ静カニヒラク	右へ扇ニテ指マハシテ、見、又引テ見 ル。
21	虚空に飛行 し	「虚空に」足拍子●— ○—○ 右へ踏込ミ「飛」○ 「し」●—●	又指廻ス様ニシテ、右へ廻り、 正面へムキ、ススム。
22	千のみ手ご とに	正へ指廻シ右へ廻り	（「に」右横に●）扇ヲ真中へヨセ、左 右ノ手ニテタテニ持、フミスル。ツ ヨミ也。
23	大悲の弓に は智慧の	シテ柱際ニテ指返シ 橋方ヲ見込ミ 両手上ゲ脇方へ三足出 扇左ニ取り左へネジ	右手ヲ放、弓ト心得、 則左へ廻ル也。
24	矢をはげて	シテ柱方へ一足出両手 ヨセ合せ	
25	ひとたび放 てば	左へ強クツ羽根扇シ テ見込	扇ヲカナメヲ先ニシテ、左方へ遣ナカ ラ、則左足ヲ扇ニ添テ、サソクニテ使 也。 舞ノ内ノ四段目ノ頭ノ取カヘス扇ヲ遣 様也。
	千の矢先	右へ受ケ面ヲ切り脇正 へ行キ	
26	雨あられと 降りかかっ て	正先へ出	初二左へ遣タル扇ヲ高上テ、 右へ取返シナガラ、 文言ニ合テ、右へ廻ル也。 ワキ正面へムキタル時分ニ、右へトル 程吉歟。
27	鬼神の勢に 乱れ落つれ ば	後ズサリ太鼓前ニテ右 へヌキ足シ 袖カムル型シテ下二居	正面へムキ合、 正面ヲ見テ「乱落レバ」ト文言ニ合テ、 扇ヲ如常、右ノ肩ノ上ニテ、取直シナ ガラ、左へ廻ル也。左右へノサソク肝 要也。 畢竟、四段目ノカシラノ扇アツカイ也。

正中ニテ橋掛向キ、 右足ヲ踏ミ止メ、スグニ右足引き、 改メテ右足踏出シ(左半身)、足拍子 (右)一ツ(強ク)踏ム時、扇平ラニ指シ、 打ツ。	→【復元メモ】29参照、別の仕方あり。 「ひらむ」＝平たくなる。ひらぶ。
早、正ヘネジ、扇トジ、合掌(一足引 キ)、足拍子、正面へ出、 合掌ノ手ヲトク。	
正ヘ一足出、見(ヨセイアリ)。	◇「ヨセイ」 〈自然居士〉【復元メモ】参照
左ヘ大キク廻り、脇前受ケズ、常座へ。 (面ヲ残シ、イキイキトシタル心持チ デ)	◇「面ヲ残シ、イキイキトシタル心持」
常座ニテ小廻り。	
小廻り橋掛リ向キ止マリ、 左・右ト出、右足引キソロエ、 足拍子(右)。	→【復元メモ】36参照、別の仕方あり。 「フミツクル」…29により足拍子と判断。
正ヘキットネジ、合掌、正ヲ見ル。	
脇正面ヘキットネジ、 合掌ノ手ヲトキ、留拍子(右)(左)。	

## 41 報告 ワークショップ「江戸初期型付に基づく実験的復元」

28	ことごとく 矢 先にか かって	立ち扇右手ニ持直シ右 ヘキリット廻り	
29	鬼神は残ら ず討たれに けり	脇正ヘ一足シカケ出 更ニ一足出打込ミ指シ ヒラキ	〔「に」と「け」の間右横に●〕橋懸ノ 方ヘムキ、右足ヲフミコミ、頓而引テ、 又フミ出シテ、一ツ足フミスル也。 ツヨミニフミツクルト同ク、扇ヲヒラ メテ、「うたれにけり」ト云文言ニ合 テ、打様ニスル。
30	有難し有難 しや真に	正向キナリニ扇閉ジー 足引き合掌	早、正面ヘムキ合テ、合掌シテ、 ノル足フミヲシテ正面ヘスミ、 手ヲ直ス也。
31	咒咀諸毒	足拍子(セツ) 「真」●「咒」● 「諸」○「毒」○	
32	薬念彼観音 の力を合わ せて	「薬」○右ヘ踏込ミ 「念彼」●—● 扇ヒロゲ「観音の」左 ヘ指廻シ 「力を」右ヘ廻り	正面ヲ見入テ、ヨセイアリ。
33	すなわち還 着於本人	見付柱際ニテ受ケ	左ヘ大二廻ル也。 面ヲ残、イキイキトシタル心持吉。
34	すなわち還 着於本人の	大小前ニテ小廻り	同、小廻ル也。
35	敵は	正ヘ一足出指シ	
36	亡びにけり		初ノ小廻ヨリ、橋懸ノ方ヘムキタル時、 右足ヲフミ出テ、又引テ、 フミツクル也。
37	これ観音の	片左右仕止メル	正面ヘ急速ニムキナガラ、合掌シテ正 面ヲミル。
38	仏力なり		〔「な」右横に●「り」左横に●〕 右ヘ身ヲヒラキ、ワキ正面ヘ急速ニム キ、合掌ヲヒラキ、足ブミシテ仕留也。



《自然居士》クセ (江口文恵)

【復元メモ】

『童舞抄』(能楽資料集成1『下間少進集I』)《自然居士》

一、曲舞、色々に有<sup>レ</sup>之也。巨三書頭一故略<sup>レ</sup>之。

※『少進能伝書』(能楽資料集成3『下間少進集II』)には、

一部クセの型を記す(別表備考欄参照)。

《参考》『岡家本江戸初期能型付』(二〇〇七年、和泉書院)

《自然居士》

曲舞、替事なし。

○「見る」所作の頻出

・「ヒラキ、ミル」という記述が多い。↓すべての「ヒラキ」が型の「開」に該当しない?

《例》「右へヒラキ、ミル」(表7、10など) ↓「右ウケ」と解釈。  
・落ちた柳の葉を意識し、「見る」「指す」所作(表5、8、11)

5「ヲツル所ハ真中也」 ↓「真中」とは?

《参考》『少進能伝書』(項羽)「下ヲミル目ツカヒアリ」

○ヨセイ(余情) 秋田城介の型付や『童舞抄』に頻出する語  
(表18、22)

『日本国語大事典』

よせい【余情】 ↓よじように同じ。

よじよう【余情】

物事が終わったあと、心から消えないその味わい。  
また、言語芸術などで、直接表現されず、言外にた  
よう豊かな情趣。特に、平安初期以来、和歌・連歌・  
俳諧などで尊重される理念をいう。余韻。

『時代別国語辞典』

よせい【余情】

① 詩歌などで、文字面だけでは表しきれない深い思  
い。又その結果、言外にまでたたよう情趣。

② 「余勢」とも。外面にまで発動して、それとわかる  
内なる勢い。また、転じて、その結果としての外  
見だけの勢い、体裁をいう。

秋田城介の型付内の「ヨセイ」用例(抜粋)

《邯鄲》「そも天のこんつとは、問答ノ内、文言ヲ分別シ

テヨセイスヘシ。

↓問答や論義での「ヨセイ」:「アシライ」に該当

《白楽天》「西ヲ詠て、一歩シテヨセイ。

《頼政》「行さしくたすけしきかな」ワキ正面ノ方ヲ詠  
ヤル。文言ニ合、山ト川トヲミル。ヨセイ也。ワ

キモ景氣ミル心吉。

↓景色を見る所作に伴う。

〔花月〕「あら面白や」ヨセイ。

〔花月〕「悲しけれ」ヒラキ、ヨセイ。ハチニツイ、方手

二持也。

↓心情を表す語に伴う。

〔田村〕「葉念披観音」、正面ヲ見入テヨセイアリ。

〔参考〕「童舞抄」〔井筒〕

「名ばかりは在原寺の跡ふりて」と云謡、古跡を恋慕するこゝろを外想に顕すべし。又余情過たるは、をよばざるよりをとれり。此心持、諸能にあり。

〔千手〕クセ (中司由起子)

〔復元メモ〕 \*各メモの冒頭の数字は表の番号と対応する

11 タイハイ

↓左右・打込

本型付で用例が非常に多い

・〔柏崎〕

一、「御法にも三界一心」挙ル 大タイハイ

一、「心仏及衆生と」右タイハイノ扇ヲ引。

上羽扇

現行金春流(シテ)「されば始めのみ法にも(地謡)

大左右

〔三界唯一心、心外無別法、心及

正先へ打込ミヒラキナリニ後ズサリ

衆生と聞くとときは

・〔柏崎〕

一、「煩惱のきつなに 結ほれぬるぞ」ヒライテ左右

タイハイ。

左右シトメル

左手ニテシヨリ

現行金春流 煩惱の絆に、結ほおれぬるぞ悲しき

22 「三河の国や遠江」タイハイシテ、フミスユル。

↓ 左右 仕止メ 拍子「お」(右)・「う」(左)

〔岡家本江戸初期能型付〕「三河の国や」ひらき、ふミスユル。又舞納めても。

31 「灯暗うしては」正面へムキ、扇ニテ一アフギ、ニツメ  
二右へ指テ廻ル。

〔金春安照仕舞付〕一、「ともしびくらふしては」と、あふぎをささへさし、左へ少こまはるしまい有レ之。

35 「四面に楚歌の声の内」扇面ニアテヌ也。ワキニカマユル也。或如常面ニアツルコトモ有。其時モ「四面」ト云文言  
二見渡ス心也。扇ワキニカマユル時モ同前也。

〔岡家本江戸初期能型付〕「四面にそかの」と、右ノ方を開て  
ミル。又扇、上はのごとくして、すぐにおろしとする。

4 身ヲ右ヘヒラキ

16 身ヲヒラキ

20 ヒラキミル

本型付で用例が非常に多い

〈山姥〉キリ (柳瀬千穂)

【復元メモ】 \*各メモ冒頭の数字は 表の番号と対応する。

1 始まる地点は、杖を後見座で渡し扇の持ち替えると判断し、常座とした。

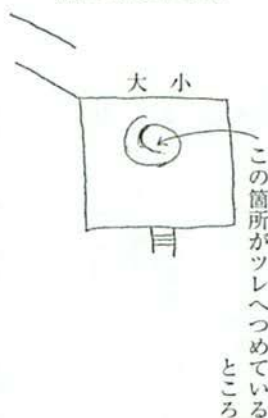
2 ここで角へ行くことに該当する記述はないが、3で左へ回っていることから、角へ行っていると判断した。

7 ここで角へ行くことに該当する記述はないが、「右ノ方へ扇指テ」いること、また8で左へ回っていることから、角へ行っていると判断した。

8 「廻り返ヌ」を、6で「右へ廻」っていることと、9で「左へ又一ツ廻」っていることから、左へ廻ることと判断した。

10 復元の「ツレへ二足詰めながら差込み」という型は、二足のハコビを左への二回目の回転の最後と解釈して考案した。

〈10のゆきみち図〉



11

原文では演技が二通り記されている。「又、只ヒラキテモ見ル。是ハタケタル也。」という第二の型(翻刻)参照は現行に近い所作と思われるが、通常の演出と思われる、頭上で扇をかく所作を採用した。「カツク」の語は秋田城介型付の他曲条では〈花月〉の装束付で、弓を背負う様子、〈鶴羽〉キリで袖を被く型などに見える。

12 秋田城介型付においては「タイハイ」即ち左右であるため(クセ各曲参照)、「左ダイハイノゴトク」は、現在の下の掛の左右のように袖をあしらう所作であろうと解釈した。

15 「足ふみちがへ」〓ソリ返りであると、秋田城介型付の他曲の用例から判断した。

▼「矢の下に射ふせられて」備(池田備後のこと)、指テ右へ廻、上面へムキ、左へ足ヲアマシテ、右足左足ヲ引、フミチカユル。又フミチカユレハ、ワキ正面へウシロカナル時、アフニコロフ也。(殺生石)

▼「我と身をきる」左ノフキノ下ヘ刀指トヲシテ、右足ヲフミチカヘテ、左ヘキリ、ト廻リ、正面ヘムク。口伝。(経政)

17 ここでの「スハリ所」(スハルは止まる意)は、18で常座を「居座」と称していることから、居座以外のスハリ所と考え、大小前であろうと判断した。

18 「(少)キヲフ」の用例は(田村)キリにもある。なお「氣負う」の一般的な意味は以下の通り。(『日本国語大辞典』第二版より) ←

きおう【競・勢・氣負】(日国)

① (競)負けまいとしてはりあう。競争する。せりあう。先を争う。

② 氣力を集中してふるまう。勇みたつ。意氣込む。勢いがある。

19 原文に「(阿古木)ノコトクモ」という型も併記されているが、通常のほうを採用した。

△田村(キリ) (深澤希望)

【復元メモ】 \*各メモの数字は表の番号と対応する。

7 秋田城介型付には6、8に関する記述がない。何もしてないのではなく、当然のこととして記述しなかったと判断し、「少進能伝書」(能楽資料集成3『下間少進集』II)によって補い、復元した。8についても同様。『童舞

抄』は記述が簡略で該当箇所についての記述なし。

▼25、27 「舞ノ内ノ四段目ノ頭ノ取カヘス扇」、「四段目ノカシラノ扇アツカイ」

25 「扇ヲカナメヲ先ニシテ、左方ヘ遣ナガラ」↓羽根扇に該当。

26 「初二左ヘ遣タル扇ヲ高上テ、右ヘ取返シナガラ」

↓左手から右手へ扇を持ち替える。右手の持ち方については左記(杜若)の用例から、扇を返して地紙を内側にして要を持つと判断。

27 「扇ヲ如常、右ノ肩ノ上ニテ取直シナガラ、左ヘ廻ル」

↓要を逆手に握った持ち方から常の持ち方に戻す。

【参考】 秋田城介型付(杜若)クセ(抜粋)

一、「かやうに」左ニ持タル扇ヲワキヘ指テ、少進ム。

一、「うたかハセ」扇ヲワキノ方ヘスツル。舞ノ四段目ノ扇也。

一、「たまふな」扇ヲ右ヘトリ返ス。内ヘ返して也。

一、「旅人」又扇ヲ折コミ、左ヘ身ヲヒラキ、ワキヲ見テ少面ヲ噉イ、左ヘ廻ル。

一、「はるく」左ヘ廻ナカラ扇ヲ肩ノ上ニテ取直ス也。

一、「きつ、や舞」一ツニテモ二ツニテモ様子次第廻テ、則対拜スル也。



## 《参考》

・『童舞抄』（能楽資料集成1『下間少進集』I）（田村）

「大悲の弓には」と云時、左へ扇をとる。「雨散と降か、つて」と云時、扇を右へ取返しておる。「みだれつれば」といふ時、扇をひしぐ。其外色々に仕舞有レ之。依下匠三書頭一故上略畢

・『少進能伝書』（田村）

「千ノ御手ごとに」扇ヲ左ヘトリ、「ちゑの矢をはけて」ト左ヘ廻、「一たびハなせバ」ト正面ヘ向、左ヘフミコフデ、ハなす。「千の矢さき」ト右ノ足ヲ引、「雨あられ」と扇ヲ折て、首ノ上ニテ右ヘトリ、右ヘ廻、あまして、「みだれおつれバ」ト首のうへにまはして、左ヘ廻、扇ヲ如レ常持。

29 原文では別の型として「爰ニテハ打仕舞セスシテ、末ノ『カタキハホロヒニけり』ト云所ニテ、如此ノ仕舞スルモ吉。」ともある。復元ではここで打つ型を採用した。

36 29で打つ型をしなかった場合の仕方として「爰ニテ右足ヲフミ出テ、フミツクルト一度ニ、扇ヲヒラメテ打様ニスルモ吉。爰ニテ其仕舞セハ、初ノ『かたきハうたれにけり』ニテハ、唯足フミト、ヨセイハカリ吉。同仕舞二度ハ悪シ。合掌ハ二度モ不苦。」とある。その際は、29「かたき（鬼神）の誤記）ハ（不残）を省略）うたれにけり」で

は、足拍子とヨセイだけの型が良いとする。打つ型を二度するのは良くないが、合掌の型の重複は問題ないとする。

○橋掛の方向を向く所作が多い。

・『童舞抄』「いかに鬼神もまさに聞らん」と云、鬼神の方を橋懸にし、味方を正面にすべし。